

ちょっと読んでみませんか（令和五年御会式）

第70話『身延御入山750年』～本源寺副住職 本間健司

今年の六月十七日は、宗祖日蓮大聖人が身延山に御入山されて750年という節目の日でした。

私も先月、妻と共に身延山を訪れ、実際に大聖人がお住まいになられた『御草庵（そうあん）跡』と御廟所（お墓）、そして本堂において読経・お題目を上げさせて頂きました。

皆さんの中にも身延山を参拝されたことのある方は多くいらっしゃると思いますが、『御草庵跡』や御廟所に参拝されたことのある方は、案外少ないのではないのでしょうか。

本堂や祖師堂は、三門の上の「菩提梯」（ぼだいとい）という長い階段を登った山上にあります。『御草庵跡』と御廟所は三門前を通り過ぎた先の身延川沿いにあります。

そこは、しだれ桜の観光客や初詣客で賑わうことのある本堂付近とは異なり、「聖域」のように静かな雰囲気が保たれています。皆さんもこの機会に、大聖人の住居があり修行場所があった『御草庵跡』を訪れ、大聖人の魂を直接感じられてはいかがでしょうか。

さて、今回の御会式プリントでは、政治の中心地である鎌倉で活躍されていた日蓮聖人がなぜ遠い身延山に入られたのか、また、当時の身延山はどのような状況だったのか、大聖人のお言葉を読みながら少し触れてみたいと思います。

「一人の人間」としての日蓮聖人の御姿を感じて頂けたら幸いです。

①身延山に入られた理由

「国恩を報ぜんがために三度までは諫曉（かんぎょう）すべし。用いずば山林に身を隠さんとおもひし也。また上古（じょうこ）の本文にも三度のいさめ用いずば去れといふ。本文にまかせてしばらく山中に罷（まか）り入りぬ」（『下山（しもやま）御消息』）

【現代語訳】

母国への大恩に報いるため、国家の危機を救おうと三度「諫曉（かんぎょう）」即ち権力者に正しい信仰の大切さを直接申し上げました。しかし、いずれの諫曉も聞き入れてもらうことは叶いませんでしたので、山林に籠って身を隠しながら実践を続ける決意を致しました。

それは、古くからの聖人の教えにある「三度諫（いさ）めて受けいられなければ去りなさい」という言葉にも基づくものです。

【解説】

大聖人は自らの命に危険が及ぶ幾多の法難に遭いながらも、正しい信仰が負けるわけがない、という強い信仰心のもと活動を続けてこられました。そして遂に「蒙古襲来」という国家最大の危機に臨んで、権力者の方から面会を求められたにもかかわらず、結局は上申を無視されてしまいました。

その「挫折感」「疎外感」を抱えながらも、先人の智慧を尋ね、自分なりの主義を持つて山に入られたのです。

「身延」を選んだ理由は、当地が有力な信者である波木井実長(はきいさねなが)の領地であり、彼の強い勧めがあつてことでした。今でも波木井氏は身延山久遠寺の「開基檀越(かいきだんのつ)」として篤く供養されています。

② 身延への道程

十二日さかわ(酒匂)、十三日たけのした(竹の下)、十四日くるまがへし(車返)、十五日おみや(大宮)、十六日なんぶ(南部)、十七日このところ。

此の御房たちもみなかへして但一人候べし。けかち(飢渴)申すばかりなし。米一合もうらず。がし(鉄死)しぬべし。『富木(とき)殿御書』

【現代語訳】

五月十二日に鎌倉を出発して、その日のうちに酒匂(小田原市)、十三日に竹の下(駿東郡小山町)、十四日に車返(沼津市)、十五日に大宮(富士宮市)、十六日に南部(山梨)、そして本日六月十七日によろやくこの身延に到着しました。

鎌倉から同行してくれていた弟子達もみな帰して、今はただ一人になりました。申しようのないほどの飢えや渴きに耐えているのが現状です。この身延は米を一合でさえ売っていないような土地で、餓死してしまうかもしれません。

【解説】

権力者から命を狙われ続けていた大聖人は、身を隠しながら一カ月をかけて身延山に御入山されました。身延が想像していた以上に貧しい土地であることを体感した大聖人は、「挫折感」に更に追い打ちをかけられたようで、身心共に参ってしまいそうだったのではないのでしょうか。

③ 身延山での生活

身延山の近辺二百メートルあたりは、積雪が三メートルや六メートルもあるのです。十月三十日には雪が少し降って止みましたが、十一月十一日から十四日までは大雪が降り、二、三日後には雨が少し降ったので、雪が金剛石(ダイヤモンド)のように堅く凍ってしまい、いまだに解けません。

昼夜を通して、考えられないくらい寒く冷たいのです。

酒は凍って石のようになり、油も凍って金のように固まってしまいう位です。鍋や釜に少しでも水が入っていれば凍って割れてしまします。

寒気が一層厳しくなってきた上に、着物は薄く、食糧も乏しく、差し入れてくれる者もおりません。草庵の建物は不完全な造りのため風雪を防ぐことができず、敷物も無く、薪を差し入れてくれる者もないので火も焚けません。(中略)

こんな厳しい状況のなか、私は去年の十二月三十日から腹の具合が悪くなり、春夏になっても下痢が止まりませんでした。(『兵衛志(ひょうえさかん)殿御返事』現代語訳)

【解説】

昔の身延は現在とは比べ物にならないくらい雪が多く寒さも厳しかったことが分かります。

現在の『御草庵跡』を訪れてみても、周りが高い山々に囲まれているので、一日のうちで陽が差し込むのがほんのわずかな時間であったことが実感出来ます。

厳しい寒さと栄養不足によって、57歳を迎えた日蓮聖人の身体は日に日に弱ってしまわれたことでしょう。

しかし、教えを求めて来てくれる弟子達(百人以上も)のために、大聖人はまさに“命懸けで”弟子の育成と教えの伝授をされていたのです。

さて、実際に『御草庵跡』の前で手を合わせ、静かに目を閉じながらお題目を唱えていると、辛い想いをグッと飲み込みながら必死に実践を続ける日蓮聖人の御姿が眼前に浮かび上がってくるような気がしました。

現在も国家的な危機的状况を迎えている母国日本の安穩を祈りながらお題目を唱え続けることは、お題目を受け継いだ私たち一人一人の責任であると感じます。

深い山中で耐え忍びながら実践を続けられた日蓮大聖人の遺徳を偲びながら…合掌

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經